

## 援助からビジネスへ～支援から協働 <その2>

### 湾岸産油国の環境問題

国際耕種ならではの活動を何か始められないか？・・・これはここ数年我々が考えているテーマの一つである。国際耕種は設立以来、一貫して乾燥地域での農業開発に関わり続けている。この経験、人脈を生かせないかと、今回我々にとって縁の深いアラブ首長国連邦(UAE)を訪問し、旧友らと語り、現地の状況を肌で感じながら今後の可能性について探ってきた。

UAE は農業・漁業省 (Ministry of Agriculture and Fisheries) の名称を水環境省 (Ministry of Environment and Water) へと変更しており、農業生産よりも環境保全や資源の持続的利用に重点を置いているようである。特に水資源への危機感は強く、地下水位の低下や塩分濃度の上昇が各地でおきている。大規模施設園芸を展開している Mirak 社の農場では 5,000 ppm もある地下水を脱塩装置で 100 ppm まで脱塩し灌水や温室内の冷却に利用しているという。そのため、効率的な水利用が期待できる施設園芸(養液栽培)への関心が高まっているようで、訪問した先々で養液栽培の話題が出てきた。このような切迫した水状況、かつ養液栽培への高い関心がありながらも、今回訪問した研究機関では養液栽培に関する試験は行われていなかった。これは、この分野に関する専門家が不足しているからではないかと感じた。一方で、国際耕種には 1980 年代に UAE で施設栽培を行ってきた社員や大学で施設園芸を専攻していた社員、また JICA 筑波で野菜栽培指導を行っている社員など、この分野においての経験を多く有している。訪問したある農業試験場では、研究者達に日本の施設園芸について話をしたところ、非常に興味を持ってもらえ、中央省庁の担当者にプレゼンテーションをして欲しいという要請も受けた。残念ながら今回は実現しなかったが、UAE の施設園芸分野において国際耕種が貢献できるように感じた。日本では主に高品質化や省力化を目的として施設園芸の研究が進められているが、環境制御や灌水・肥培管理など UAE でも応用可能だと思われる技術も多い。今回訪問した試験場や大学農場、あるいは新たに農業に参入しようとしている民間企業などと共同でこの地域に適した栽培システムを開発し、それを広く普及させるといったことをビジネスとして展開していけるのではないかと感じた。

ドバイにおいては、海岸線の地形までも変化させてしまうような異常とも思えるウォーターフロントの開発が進められている。その裏では海洋汚染も深刻な問題となっているようで、近年赤潮が頻発しているという。1980 年代に JICA の協力によって設立された水産試験場においても、当初行なわれていた養殖技術の確立と普及に関する活動に加え

て、赤潮の発生原因の究明やサンゴ礁の増殖や移植に関する試験が活発に行われていた。また、この試験場ではマングローブ植林に関する試験活動も実施されており、30 年前に植林が進められた排水路周辺には立派なマングローブ林が形成され魚影も濃い。苗木生産も継続的に実施されており、毎年各地の植林サイトに提供している。我々がこの試験場を訪問した際、小学生グループを対象とした環境教育プログラムが実施されていた。未曾有の大開発が進む UAE において、次世代を担う若者達を対象として地道に環境教育を継続することは本当に大切なことと考える。国際耕種にはオマーンにおけるマングローブ林の再生と保全に関する経験がある。植林活動に参加した小学生達は翌年「このごろ木が大きくなって、鳥や魚が増えてきた」と語る・・・こういう経験が本当の環境教育なのだと感じている。その他、多くの途上国においても研修ニーズの掘り起こしや研修プログラムの策定に携わってきた。こうした経験をうまく利用し UAE 政府と共同で、あるいは NGO を立ち上げるなどして、現場に根ざした環境教育プログラムを展開できるのではないかと考えている。

このように、国際耕種の目指すビジネスとは単なる利益追求ではなく、各地域が抱える問題の解決に貢献し、その活動を持続させたいという考えが基になっている。大規模且つ急ピッチに進められる開発と、その歪から生じる環境問題に取り組んでいくための組織作りや、活動を継続させていくための仕組み造りに国際耕種のこれまでの経験が少しでも生かせないか。今回の視察はその第一歩であり、これをなんとか次のステップに繋げていきたい。



30 年前に植林されたマングローブ(上)



水産試験場での環境プログラム(右)